

あとがき

私は一九九三年四月から翌九四年三月までの、まる一年間をバンコクで過ごした。タイ研究者の北原敦氏（神戸大学）が、アジア経済研究所入所の同期生であるという誼でタイに無縁ではなかったが、南アジアのインドやバングラデシュの政治史を専門にしてきた私には、東南アジア、それもタイについての予備知識は皆無に近かった。バンコクに移ってからの数カ月間は、身の回りに南アジア関係の書物がなかったこともあって、タイについての知識の習得に費やした。これはやむをえぬというよりは、バンコクにおいて南アジアの勉強をあえてする気が起きなかったのである。外国や日本の研究者によって書かれたタイ研究書を読んだあとで、街に出る現場で本の中身を思い返したりできる環境が、むしろ、新鮮で楽しかったからである。すべて理解できるわけではないが、街中にあふれるタイ語の看板や道路表示を、インドの文字に対応

させながら読みとつてみるのも、なんともいえない面白さがあつた。二六年も前に、カルカッタの街をベンガル語を憶えるために、毎日のように歩きまわったときの好奇心に満ちた気分を久しぶりに思い起こした。もつとも、言葉を憶える速度はおそらく何十分の一以下に低下してはいたが。

しかし職業意識とは根強いものである。バンコク市内ですれ違うインド人の姿は早くから気になつた。ブラフマやインドラの祠が街の随所にあつたり、春耕祭の朱塗りの犁が、インドの犁と寸分違わぬことにも驚かされた。やはり私はバンコクのなかのインドを見ていたのである。少しづつタイのインド人について書かれたものを探しはじめたり、ルンピニー公園をはさんでアパートと反対側にあることを知つたインド人商工会議所に資料をもらいに行つたりした。しかし、日本のタイ研究者にも、そして何人ものインド研究者に知られていて、私がある時まで知らなかつただけの「タイ・インド文化ロッジ」によく行きついたときは、もう十月に入つていた。もともと準備してこのテーマを選んだわけではないツケを支払つたのである。タイのインド人社会について何か書き残しておかねばいけないのではないかという気持ちだが、この頃から少しづつ湧いてきた。

年を越して、久しぶりにバンコクでお目にかかつたタイ政治史研究者の村嶋英治氏から、政府文書館で入手されたインド国民軍関係の情報を教えていただいたり、インド研究者にふさわ

しいテーマだと励まされたりして、ようやく本気で取り組むようになった。文中で述べたように、カルナー・クサラ・サヤ氏のこと、村嶋氏から教えられた。結局村嶋氏には、帰国後も草稿に目を通させるなどと、指導教官並みの役割を厚かましくも果たさせてしまった。タイ語の表記までも正していただいたりしたが、門外漢の箸にも棒にもかからぬ誤りには目をつぶっていた。

本の性格上、注記をほどこすことができなかったが、多くの箇所直接話をうかがったバンコク在住の人々の発言や指摘を引用している。そのなかでも比較的頻繁に会うことができたのは、タイ・インド文化ロτζジの関係者である、K・L・マッタ、R・L・サチデーヴァ、D・S・バジャージ、カルナー・クサラ・サヤの諸氏にタールクダール夫妻、そしてインド・タイ商工会議所の事務局長ベストンジー氏、アアリーヤ・サマージのR・P・パンデー氏らであった。グル・シン・サバー・グルドワラの事務室にも何度か邪魔をして資料を閲覧した。この小著を見ていただきたいのは、親切にしてくれたこれらの人たちだが、日本語のこの本を見てどんな顔をするだろうか。文献はロτζジの資料書架、タマサート大学の中央図書館、経済学部、法学部および政治学部の図書館、チュラーロンコン大学のタイランド・インフォメーション・センター(TIC)、バンコク・ポスト社の資料室などを利用した。とりわけTICで事項別に保存している古い雑誌記事や論文、さらに政府報告書の類は自力で探し出すことはおよそ不可

能な資料で、そのなかの「インド人」ファイルから、貴重な文献を利用することができた。

アジア経済研究所バンコク事務所の林俊昭、東茂樹のお二人には、資料利用の便宜をはかっていただいた。研究所とは身分上は離れていたが、バンコク事務所の名前を借らせていただいたことで、ずいぶん便宜をうることができた。またバーンラク幼稚園の佐藤正喜氏に呼ばれ、タイ滞在経験豊かな人たちの前で無謀にも「タイのインド人」の話をした時には、『タイランド情報』誌の吉田隆氏をはじめ、多くの方に逆に教えを乞うことになった。

帰国してからも、研究所内外のタイ研究者、研究所の多くの同僚諸氏に助力をいただいた。とくに、東京大学の末廣昭氏には関連資料に加えて、御自身が足で集められたパーフラット、サンペンの繊維商に関するデータまで使わせていただくという御厚意にあずかった。勤務先の研究所では井村哲郎氏からアメリカの政府公文書館のインド国民軍や東南アジアのインド人関連の資料をはじめ、貴重な一次資料を多数お借りした。またインド研究の同僚松本脩作氏と井上恭子氏からは在外インド人関連の記事を入手される度に、写しを頂戴した。研究所の船津鶴代さんに紹介していただいたティラポルピタクチャツティワンさん（横浜国立大学国際経済法学部修士課程）にはインド人の宗教施設に関するタイ語文献を訳していただいた。さらに、マレーシア研究者である原不二夫、鳥居高のお二人からは、マラーヤのインド人関連の資料や情報をお借りした。泰緬鉄道とインド人の関係については、お二人からの資料に多くを学んでいる。ま

た、重富真一氏をはじめ、研究所のタイ関係者の方々から、私がこの主題で所内で行った報告へのコメントなど、さまざまな示唆をいただいた。

本来であれば、本書の内容はもっと時間をかけて書かれるべきであったかもしれない。対象範囲を広げすぎ、事実の確認が疎かになつてはいないかとも危惧している。せつかく多くの資料、情報をいただきながら生かせなかつた部分があつたこと、また本の性格上注記を施せなかつたことなども気にかかつている。タイ語の知識があれば利用できた文献も多い。タイ語のできるインド研究者が欲しいというのは贅沢な願いであらうか。

小著の筆を擱くにあたり、客員研究員としての籍を許していただいたタマサート大学東アジア研究所のスラチャイ・シリクライ教授に、そして一年間の在外研究を支援してくださつたアジア経済研究所および国際交流基金の関係各位に厚く御礼を申しあげます。

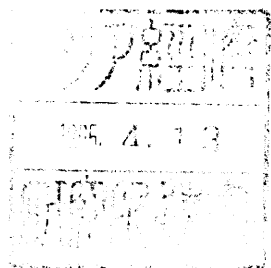
佐藤 宏

一九九四年十一月十一日

1

2
2011

9



地中海から太平洋まで、この広くアジアと呼ばれる地帯には幾十かの国がある。その大部分は第二次世界大戦後、古い植民地体制から脱して振興の独立国となったものである。世界の人口の半ば以上のものがここにある。これらの新興国はそれぞれの立場に立って、建国創業の仕事に力をつくしている。

その業は果たして障害なく着々と進んでおるか。だれもがこれに対して頭をかしげるであろう。そしてだれもがアジアは「流動的」であるという。

流動的とは何であるか。また何でないか。いくたの混みいった事態のなかを、一本の金の線が生々発展的に縫っているのも流動的である。経済は着々と成長し、政治は一つの体制のなかで徐々に整備されているような場合がそれである。

アジア諸国の大部分については、事態はこのように簡単ではない。もちろん、経済の場面には大きな発展・成長の芽生えはある。しかし、他面においてそれを抑制するものが力づよい。またおよそ発展や成長を考える場合、在来流行の理解によるパターンを以つてするのが果たして正しいか、との疑問もでてくる。さらに政治体制については、イデオロギーの対立、複合民族国家における特殊なナシヨナリズムに伴う民族や種族間の闘争があつて、政治的安定はなかなか期すべくもない。独立国家の幼年期に伴う政治的、行政的未熟もまた考えられるべき大きな原因である。

こういう次第で、アジアが流動的であるとは、一つの混沌を意味するものといえようか。そしてその上に立っていかなる経済・社会・政治の体制が整いだされるであろうか。——この意味で二〇世紀後半のアジアは世界における「問題」、いな最も大きな「問題」である。

アジア経済研究所は、まさにこの「問題」の理解に向かって、ひたすら前進をつづけている。われわれの期するところは、まさにそれぞれの国の現実在即した精確な知識を供しよう、そしてこの大きな「問題」について静かなサービスをいたそうとするに尽きる。設立以来すでに七十年余り、専らそういう道歩んできたし、今後もそれに変わりはない。このシリーズは、多くの研究や調査の報告書、現地調査を土台として、アジアについての解説書・教養書たることを目標とするものである。

一九六六年三月